

聖書:第一列王記12章1～15節

説教:主がそうし向けたので

はじめに

今日からまた第一列王記をしばらく見てまいります。まず、ここまでのあらすじを振り返ってから今日の箇所を見ていきます。

ダビデが亡くなったとき、その跡を継いでイスラエルの王となったのがソロモンです。彼はイスラエルの歴史の中で、最も繁栄した時代を築きます。例えば、ソロモン王が使っていた器はすべて金でできていたと言われ、海外からはどんどん当時の貴重品が輸入される。それに加えて、ソロモンの知恵のすばらしさは世界中の注目の的となり、ソロモンのことばを聞こうとしてわざわざ遠い外国から訪問する人たちが絶えることがなかったと言われます。

そのソロモンが亡くなって、跡を継ごうとしたのが今日登場するレハブアムという人です。読んでいくと、レハブアムは父ソロモンとは違ってあまり良い王さまではなかったことが分かると思います。でも分からないのは15節のことばではないでしょうか。レハブアムが心を頑なに民たちの願いを聞き入れなかったのは、「主がそう仕向けられたからである」と書いてあります。神は人の心を好き勝手に操作しているのでしょうか。もしそうであるなら、結局この世界で起きているすべての悪いことは神の責任であって人間には責任がない、という話になってしまいます。そんなはずはありません。ではどうしたことなのか。そしてこの箇所は私たちにとってどんな励ましになるのか。ともに見てまいります。

## 1 レハブアム

### 1) そうすれば仕えます

日本では天皇の代替わりが今年の春に予定されていて、法律によって次の天皇は長男である皇太子が継ぐことに決まっています。旧約の時代はどうなのか。4節にこうあります。「あなたの父上は、私たちのくびきを重くしました。今、あなたは、父上が私たちに負わせた過酷な労働と重いくびきを軽くしてください。そうすれば、私たちはあなたに仕えます。」

イスラエルの族長たちがシェケムという町に集まり、次の王はだれがふさわしいか相談します。血筋から言えば当然ソロモンの子であるレハブアムが王に就くべきですが、一つ条件をつける。「もし

こうすれば、私たちはあなたに仕える。」という言いかたをします。もちろんいつもこうしたわけがありません。民の方にこう言わなければならない切実な事情があったのです。

### 2) ソロモンの子としての重圧

その事情についてはまた後で触れることにして、その前にレハブアムの反応を見ます。まずソロモンに仕えていた経験豊富な長老たちの意見を聞きます。民たちの要求を聞くべきであるとアドバイスする。次に、昔からの友人たちに同じことを尋ねる。そうすると、彼らは先ほどの長老たちのことばとは正反対のアドバイスをします。

レハブアムは長老の意見を聞かず、友人たちの意見を聞くことにした。なぜか。彼自身が語ったことばの中に理由が隠されています。14節。「私の父がおまえたちのくびきを重くしたのなら、私はおまえたちのくびきをもっと重くする。私の父がおまえたちをむちで懲らしめたのなら、私はサソリでおまえたちを懲らしめる。」

お気づきかも知れませんが、彼が「私の父が」言った後で「私は」と言い直す、このパターンを二回繰り返しています。偉大な父親のもとに産まれた子どもは大変な苦勞をされると言われます。彼もそうでした。いつも父親と比較され、父親の縄目から抜けられない。何かあればすぐに軽く見られ、馬鹿にされてきた。そうさせないためには、強い自分を演じなければならない。その結果、彼は必要以上に厳しいことばで追い返し、民の要求を拒否してしまいました。

### 3) 主を求めない(第二歴代誌12章14節)

レハブアムには同情すべきところはあります。でも、第二歴代誌12章14節には、こう書かれています。「彼は悪事を行った。心を定めて主を求めるときをしなかったのである。」

親が悪いとか、環境が悪いという言い方をときどきしたくなることがあります。でも聖書はまったく別の言い方をします。レハブアムの場合、彼が主を求めなかったことが何よりも問題なのだというのです。確かに主に祈り求めたことはどこにも書かれていない。自分の心が満足するような方向だけを選んで突っ走っていくきます。彼が行った悪事とはこのようなことでした。

## 2 ヤロブアム

### 1) ソロモンの忠臣であったが

さてここでもうひとりの人物、ヤロブアムに目を留めていきます。彼のことについては、11章27節以降に詳しく書かれています。彼は、その働きぶりをソロモンに認められて重要な地位に抜擢されたのですが、あるとき預言者アヒヤの語ることを聞きソロモンに刃向かう決心をします。ところがクーデターは失敗し、エジプトに逃れてそこに住んでいた。

### 2) アヒヤの預言 (11章33節)

あれほどの忠実で有能なヤロブアムがどうしてソロモンに逆らおうとしたのか、不思議に思うかもしれません。彼の心の中に野心がなかったとは言いません。でもそれだけではない。もう一つ大きな動機があったと考えられます。預言者アヒヤがヤロブアムに向けて、イスラエルがやがて二つに引き裂かれることを語った後に、11章33節でこう語っています。「というのは、人々がわたしを捨て、シドン人の女神アシュタロテや、モアブの神ケモシュや、アンモン人の神ミルコムを拝み、父ダビデのように、わたしの目にかなうことを行わず、わたしの掟と定めを守らず、わたしの道に歩まなかったからである。」

ソロモンが王の座についたときは主に従うことを大切に考えていたのに、次第に道をそれていき、外国から迎えた妻たちの影響を受けてほかの神々を拝むようになってしまった。それで神はソロモンの手から王国を取り上げる。

### 3) ソロモンへの不満

ヤロブアムがこれを聞いたとき、ずっと心に抱えてきたソロモンに対する不満に火がつきます。どういうことか。彼がまだソロモンに見いだされる前、ミロという谷を埋め立てる土木工事の監督をしていたときのことで。工事現場には、国中から強制的に駆り出されてきた男たちが集まっていました。賃金はもらえません。故郷の家では大事な働き手を取られ、残された年寄り子どもが貧しい暮らしを強いられている。いっぼう、ソロモンはどんどん豊かになっていく。当然、ソロモンに対する不満の声が出ます。その声をヤロブアムは聞き、以前から民たちに同情していた。それで彼はアヒヤの預言を聞いたとき、ソロモンに刃向かったのです。

3節で「人々は使者を遣わして、彼を呼び寄せた」のは、あのヤロブアムなら自分たちの苦しい思いを理解してくれるだろうと考えたからです。

この交渉はレハブアムが拒絶したことで、決裂してしまいます。その結果、ヤロブアムは北王国の王の座に迎えられ、レハブアムは南王国の王となって袂を分かつこととなります。そのことはまた次回触れることとなります。

## 3 主がそう仕向けられたので

### 1) なぜ?

さて今日見ておきたいのは、15節のことでした。「王は民の願いを聞き入れなかった。かつて主がシロ人アヒヤを通してネバテの子ヤロブアムにお告げになった約束を実現しようと、主がそう仕向けられたからである。」

「かつて主が白人アヒヤを通してお告げになった約束」とは、今言ったようにイスラエルが北と南の二つの国に分裂することを指します。「仕向けた」と言われると、神が積極的に関わって物事を推し進めたという印象があります。でもよく見るとどうでしょうか。そもそもこんなことになったのは、ソロモンに原因があります。彼は主に従うことが大切だと知っていたのに、従わなかった。それでも神の責任でしょうか。いいえソロモンの責任です。

ではレハブアムはどうか。彼は10節後半で、彼の友人たちに「私の小指は父の腰より太い」と言わせています。父親を侮辱したことばですが、「あなたの父母を敬え」と語るモーセの十戒に背いています。これも神が言わせたのですか。いいえ、レハブアムの心にあることを代わりに語ったのです。そうしますと、「主がそう仕向けた」という表現はこう考えるべきでしょう。神はあえてレハブアムを止めようとせず、そのままにしておいた。

こう言うと必ず反論があります。神が私たちを愛しているというのなら止めるべきではないのか。まっとうな疑問です。でも残念ながら私たちは痛い目に遭わなければ、自分の罪がどれほどひどいものかわからない。だからあえて止めません。それでも納得できないでしょうか。神がいつまでも手を出さないのならそうでしょう。しかし神は私たちに関わるのです。

### 2) 王となる者の二つの資質 (7節)

そのことは7節が示します。「今日、もしあなたがこの民のしもべとなって彼らに仕え、彼らに答え

て親切なことばをかけてやるなら、彼らはいつまでも、あなたのしもべとなるでしょう。」

これはイスラエルの王にふさわしい者の資質について二つのことを簡潔に言い表している。一つは、民のしもべとなって彼らに仕える。二つ目は、民の願いに応じて親切なことばをかける。これが王の資質だということです

だれがこのような王となれるのか。レハブアムは失敗しました。しかし私たちの王となられたイエス・キリストは違います。この方は、私たちにしもべとなって仕えてくださいました。私たちのひどい罪を背負われて十字架におつきになる。これ以上の仕え方がありますか。この方は、私たちが罪と苦しみから救ってくださいと叫ぶ私たちの声を聞いてくださり、私たちに慰めと励ましのことばを語ってくださいました。語るだけではなくて、ご自分が語ったとおりのことをしてくださった。

「主がそう仕向けたからである。」神が冷酷な方だからそうするのではない。罪がはっきりと示されなければ、私たちは神に救いを呼び求めないのです。だからあえて止めない。ひどいのではない。愛しておられるからこそそうされる。厳しいかも知れない。でもそこに真の愛が示されています。